平成２７年５月１７日

愛媛県ミニバスケットボール連盟
加盟チーム関係各位

愛媛県ミニバスケットボール連盟

# ゾーンディフェンスの禁止について（お知らせ）

平成２７年度「第４７回全国ミニバスケットボール大会」より、ゾーンディフェンスが禁止になります。それにともない、平成２７年度「第３６回四国ミニバスケットボール大会」も同様に運営することとなりました。

【現在の状況とゾーンディフェンス禁止の方向になる背景】

FIBA　MINI の規則（国際ルール）に、日本ミニバスケットボール連盟の規則が違反しています。このことを重く見た FIBA に、ゾーンディフェンスについて日本ミニ連が説明を行いました。（別紙「FIBA への説明・要望事項等」参照）

【愛媛県ミニバスケットボール連盟の方針】

愛媛県ミニバスケットボール連盟では、ミニバスケットプレイヤーのよりよい育成の観点からもマンツーマンディフェンスをしっかり身に付けさせることは大切であると考えます。

子どもたちが、ボールを見て、マークマンを見てディフェンスし、一生懸命ボールを追いかけることが理想の姿です。ゾーンディフェンスは有効な戦略・戦術ですが、決まった場所を守る消極的なディフェンスであるとも言えます。そして、昨今マンツーマンディフェンスが身に付いていない子どもたちが目立つようになっているのも事実です。子どもたちの将来を考えると、「身に付けておかねばいけない基本的な技術（オフェンス、ディフェンス両方）とは何か。」「バスケットボールの本当の楽しさとは何か。」を伝える必要があります。

そこで、当連盟としては、今年度の県大会（四国大会予選・スポレク大会・全国大会予選）からゾーンディフェンスを禁止していくことにしました。

指導者の皆様には、これらの趣旨を理解していただき、子どもたちのより良い育成に力を注いでほしいと願っています。

年度が始まってからの施行で、何かとご迷惑やご不便をおかけすると思いますが、バスケットボール界が大きく変わろうとしています。何とぞ、ご理解とご協力をお願いいたします。

【マンツーマンディフェンスとは】

今後の県大会では、マンツーマンディフェンスを少なくとも以下のこととととらえ、共通理解としていきます。

○　マンツーマンディフェンスとは

・１線　ボールマンにマッチアップをする。

・２線　マッチアップ及びヘルプポジション（マンマークを前提とする。）

・最初から制限区域内だけを守ることはしない。

ゾーンディフェンスとマンツーマンディフェンスの明確な線引きは困難ですが、マンツーマンディフェンスの考え、動き方、的確なポジション取りなど基本的なことをしっかりと子どもたちに身に付けさせていただきたいと思います。日本ミニ連よりは、今後ＤＶＤなどの資料を各県に配布する予定と聞いています。県ミニ連としましても、手探りの状態でのスタートとなりますが、各地区および各チームの方々のご協力をお願いいたします。

【イリーガルディフェンスの対応について】

ゾーンディフェンスかどうかの判断は、会場主任・コミッショナー等が行います。罰則は設けませんが、必要に応じてクォータータイムやゲームクロックが止まっているタイミング等で指導を行います。明らかにゾーンディフェンスと分かる場合は、試合を止めて指導する場合もあります。

**特に、四国大会・全国大会に推薦するチームについては、愛媛県代表として、チーム力・マナーだけでなく、ゾーンディフェンスに抵触することのないチームを推薦する予定です。**

別紙参考資料　「月刊バスケ６月号　臨時増刊」　ミニバスケットボール界に訪れる改革

日本ミニバスケットボール連盟理事長　坂本昌彦氏　コラム

平成26年12月14日

日本ミニバスケットボール連盟
理事長　坂本昌彦

# ＦＩＢＡへの説明・要望事項等

## 1. 日本のミニバスケットボールゲームにおけるゾーンディフェンスの施行について

### （1）経　緯

ＦＩＢＡＭＩＮＩの規則ではゾーンディフェンスが禁止されているが、日本においても１９８５～１９８８年の４年間、禁止にしていた時期がある。しかし、現場において混乱を生じ、その不具合を解決できなかったことから、現在はゾーンディフェンスはマンツーマンディフェンスと同じような戦略・戦術として認めている。

### （2）方　向

日本のミニバスケットボールプレイヤーのよりよい育成の観点から、ゾーンディフェンスを禁止の方向で検討を進めている。規則の変更として捉えるのではなく、大会要項等の変更から始める。

### （3）方　策

日本のミニバスケットボール指導者があまりにも勝利至上主義にとらわれることからゾーンディフェンスの活用が見られる。その指導者に対して勝利至上主義に偏らない、健全なプレイヤー育成について啓発活動を全国的に進める。

## 2. FIBAMINIの規則における要望

### （1）コートにおける制限区域の変更

ＦＩＢＡ競技規則では２０１０年10月から（日本では２０１１年４月）制限区域のサイズ変更があり、台形から長方形になった。しかし、ＦＩＢＡＭＩＮＩの規則では台形のままなので、施設利用面で不都合が生じている。日本の小学校体育館は法律によって学校開放という、一般の方達にも、平日の夜や休日体育館の使用を認めている。そのため、一般大会使用時にはラインを引き直す等の作業を行わなくてはならない。逆に公共の体育館であれば、ミニバスケットボール大会を開催するときには、台形にコートを作り替えねばならない作業が生じる。できれば、ＦＩＢＡＭＩＮＩの規則のコートサイズ（制限区域）を台形から長方形へ変更していただきたい。

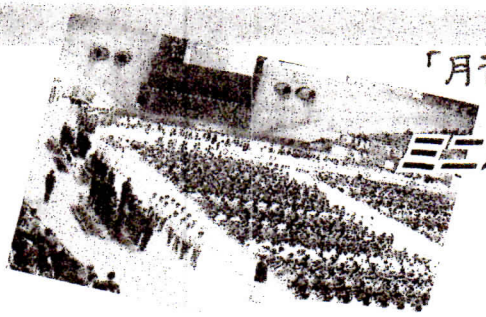
### （2）ゾーンディフェンスの記述を規則ではなく、別の要項として記載する

ＦＩＢＡＭＩＮＩの規則に「ゾーンディフェンスを禁止する」が掲載されているが、ゾーンディフェンスは規則ではなく戦術と捉えられることから、競技規則から外し、別要項で記載するようお願いしたい。

## 3. FIBAMINIの規則を活用した、U－12の国際大会の開催

現在 、アンダーカテゴリーの世界選手権がＦＩＢＡ主催で開催されるようになった。是非、ミニバスケットボールにおいてもＦＩＢＡ主催のＵ－１２の国際大会を開催実施することを希望する。現在のＦＩＢＡＭＩＮＩの規則が世界の児童の実態に則しているのかどうか、検証する意味においても必要であると考える。

「月刊バスケ 6月号 臨時増刊」
平成27年4月25日発行



# ミニバスケットボール界に訪れる改革

坂本昌彦

日本ミニバスケットボール連盟理事長
神奈川県バスケットボール協会副会長
1953年7月30日生まれ。北海道出身

現在、バスケットボール界ではさまざまな改革が行われようとしている。それは、ミニバスケットボール界においても同様である。以前より議論がなされてきた『ゾーン・ディフェンス』の禁止や、全国大会の『4校区制限』について、日本ミニバスケットボール連盟の坂本昌彦理事長にお話をうかがった。

## 勝利至上主義ではなく子どもたちの成長を共に喜びたい

インタビュー／飯田 康二（月刊バスケットボール）

### ゾーン・ディフェンスは禁止に

**ミニバスケットボールにおいても、ゾーン・ディフェンス禁止のルールを導入することが決まったとうかがいました。**

「国際連盟（FIBA）の規定しているミニバスケットボールのルールにおいて、ゾーン・ディフェンスが禁じられていることもあり、日本ミニバスケットボール連盟でもゾーン・ディフェンスの禁止を検討してきました。ご存じのように、日本バスケットボール協会がFIBAから制裁を受けたこともあり、ミニバス連盟としても、これを機に改革を進めなければといった思いがあります。また、現在、改革の中心となるFIBAのタスクフォースでは、アンダーカテゴリーの強化についても話し合われています。ゾーン・ディフェンスの禁止については低年齢層における将来的な競技力の向上を考慮し、15歳以下のカテゴリーでのゾーン・ディフェンスの禁止が検討されています。当然ミニバスも含まれるわけです」

**そもそも、ミニバスケットボールにおけるゾーン・ディフェンスの弊害とはどういったことなのでしょうか。**

「マンツーマンでのディフェンス、オフェンスといった攻防を身に付ける前に、ゾーン・ディフェンスを導入してしまうことは、選手の成長を妨げるといったことが指摘されていますし、それが世界的な潮流でもあります。

また、ミニバスケットボールに関して言えば、単に選手の強化ということではなく、普及や育成といった部分に重きを置いています。つまり、多くの子どもたちにバスケットボールの楽しさを知ってもらいたいということが大前提にあるのです。そのための一つとして、まずはシュートを入れる楽しさを知ってもらいたいと思っています。

シュートが最も入るのはゴールに近いところです。ゴール近くのシュートを大切にし、シュートが入る喜びを知ってもらいたい。そして、今度は相手をかわしてシュートを決めれば、もっとうれしいでしょう。パスをもらってシュートを決められたらさらに楽しい。パスを出した選手も楽しい。そんなふうに段階的に、バスケットボールの楽しさを実感しながら成長していってほしいのです。バスケットボールはチームスポーツですから、一緒にプレイする仲間がいるから楽しさ、喜びがより膨らみます。それは一緒にゲームをする相手も同様で、ゲームをできる相手がいるから楽しめる。だから、相手を『敵』ではなく一緒にプレイする『仲間』として、共に成長していってもらいたい。そうした思いがミニバスの原点としてあるのです」

**確かに、ゾーン・ディフェンスは、ゴール近くからのシュートを防ぎ、アウトサイドからシュートを打たせようといったことが狙いになります。外からのシュートはどうしても確率が低くなりますし、力のない子どもたちにとっては、大人よりも顕著にその効果が表れますね。ゾーン・ディフェンス以外にも、ミニバスでしか通用しないプレイをよく見かけます。**

「そのようにして自分たちのチームが勝つことだけを目指すというのは、ミニバスケットボールが求めていることとは、やはり違うのではないかと思っています。勝利至上主義でいけば、ゾーン・ディフェンスは有効かもしれません。一人一人にディフェンスの仕方を一から教えていくより、指導も楽かもしれません。もちろん、指導をきちんとした上で、ゾーン・ディフェンスを採用している指導者もいることは分かっていますが、一方で、相手チームの子どもたちからバスケットボールの楽しさを奪ってしまいかねません。ミニバスケットボールの年代では、そうしてチームが勝つことよりも、子どもたち一人一人が成長していくことを第一とし、その成長の喜びを指導者や保護者たちにも共感してもらいたいですね」

**日本でも以前、ゾーン禁止のルールを採用していたそうですね。それはなぜ続けられなかったのでしょうか。**

## 校区数制限の緩和と全国大会の在り方

**全国大会における校数制限への不満の声もよく耳にします。**

「1980年代終盤にゾーン・ディフェンスを禁止するルールを試行しました。4年間ほどでしたが、そのときはルールの整備もままならず、レフェリーが試合中にゾーンか否かを判断するといったやり方だったので、現場ではとても混乱したのです。ゾーンかマンツーマンかを判断することは、とても難しい要素を含みます。レフェリーがゾーンだと判断しても、そうではないと反論をされたり、逆に相手チームや周囲から、ゾーンだと指摘されたり。相手を離して守っているのか、ゾーンなのか。スウィッチなどもあるわけですからね。そうして現場は混乱し、収拾が付かなくなった一方で、ゾーンを禁止したことの効果の検証といったものは一切行われなかった。それで続けられなかったのです。

今回はその反省から、できるだけルール上の整備も進めたいと思っていますし、映像などで、分かりやすく伝えられるようにしていきたいと思っています。しかし、いくらルールを整備しても、そのルールの抜け道を探したり、逆手に取るようなことを考えるチームが出てくることも事実です。ですから、何のためにゾーン・ディフェンスを禁止にするのかといったことを、よく理解してもらいたいわけです。それは、自チームが勝つことだけを目的とするのではなく、ミニバスケットボールの選手たち一人一人の成長が第一にあるということです」

「もともと必要があったから生まれたルールですが、校区数の制限だけでなく、全国大会の在り方自体を考えていかなければならないと思っています。

平成24年度の全国大会から4校区制限については一部緩和しました。原則は『4校区以内で構成・活動している単独チーム』なのですが、児童数の減少など、地域の事情でチームが形成できない場合などは、4校区を超えている場合でも特例を認めるとしたわけです。つまり、『強化』のために選手を集めたチームでなければ、参加を認めようという考え方ですが、強化か否かは分かりづらい部分もあり、今後も検討をし、改善していかなければと考えています。そもそも全国大会に関しても、以前のような交歓大会形式に戻した方がいいのではといった考え方もあります。同年代のバスケットボールを楽しむ選手たちが、日本全国から集まり、友好するといった場は、とても貴重なものだと考えていますし、他国から同年代のチームを招待するなどのアイディアもあります。新たな魅力のある、より良い大会の姿を求めていきたいと思います。

一方で、強化につながる考え方も必要な時期に来ています。日本協会が推進するエンデバー（一貫強化システム）を、U-12（12歳以下）でも採り入れ始めているのですが、これまでは、いわゆるピックアップ（選抜型）ではなく、希望者が参加できるような形で進めてきました。しかし、やはり同年代の中で、優れた能力を持つ選手がいることも事実ですし、そうした選手たちに、より良い環境の下で指導を受けるチャンスを与えることも必要なのだろうと思います。サッカーなどの他の競技では、現在、盛んにそうしたエリート強化が行われていることもありますし、バスケットボールの選手たちにも、そうしたチャンスがあるべきでしょう。

全国大会を交歓大会として、普及の場としての位置付けをはっきりとし、一方で、エンデバーによって選ばれた、ブロック選抜チームによるトーナメント戦を並行して開催するといったことも考えられます。現在、日本のバスケットボール界は、タスクフォースによる改革が推し進められているわけですから、この機会に、ミニバスケットボール界も現状に即し、何が子どもたちのためになるのかを考えながら、改革していければいいと考えています」

### ゾーン・ディフェンスの禁止

バスケットボールの導入期には、将来的な成長を考慮し、1対1の対人関係による攻防を身に付けた方がいいとする考え方で、国際連盟のミニバスケットボールのルールにも、ゾーン・ディフェンスの禁止が規定されている。ゴール近く、ペイントエリア周辺の狭いエリアでゾーン・ディフェンスをすることで、対戦相手はアウトサイド・シュートを強いられる。また、ディフェンスも動き回る範囲が小さく、個々の選手の上達につながらないケースが多いことなどが指摘されている。

### 4校区数制限

全国大会に出場するために、選抜チームを作ることなどを制限するために生まれた規定。全国ミニバスケットボール大会に出場するチームは、登録選手が通う小学校が4校以内で構成されていなければならないとし、平成9年度より実施。勝利至上に走るあまり、選手の引き抜きが行われたり、同地域内で一定のチームに選手が集まり、他チームに選手が集まらないといったことを防ぐためであった。現在は少子化などの影響もあり、多数の学校から選手を募らないとチームを維持できないといったことから、規定の見直しを求める声も多い。